

令和元年6月13日現在

機関番号：32708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02255

研究課題名(和文) 環境美学における自然美論の発展的基礎付け

研究課題名(英文) Developmental foundation of natural aesthetics in environmental aesthetics

研究代表者

平山 敬二 (Hirayama, Keiji)

東京工芸大学・芸術学部・名誉教授

研究者番号：50189867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：近代における伝統的自然美学は、人間と自然とを対立的にとらえ、自然を人間と対峙するものにとらえる傾向が強いが、現代の環境美学においては、自然を人間の生活空間としてとらえる視点がその基礎として要請されている。自然を支配し利用することをその主要目的とする近代文明の基本的なあり方を超えて、自然と人間とが調和して生きていくことを可能とする未来的な文明の確立のためには、エコロジック的観点からの自然美学の確立が必要である。現代における自然美学をめぐる問題の哲学的基礎付けのためには、そのような意味でも、東洋的自然観と西洋的自然観の新たな総合の上にその展望を切り開いていくことが必要であると認識に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代ドイツにおける自然美学研究を基に、ドイツ人研究者と日本人研究者との共同研究により、従来の日本における環境美学研究の枠組みを超える新たな環境美学研究の可能性を探求することができた。特にG.ペーメ氏(ダルムシュタット工科大学)との直接の研究交流により、エコロジック的自然美学についての本格的な研究基盤を獲得することができたことは、日本における今後の環境美学・自然美学研究にとって大いに資するものであると言える。

研究成果の概要(英文)：Traditional natural aesthetics in modern times tend to treat humans and nature in a contradictory way and regard nature as confronting human beings, but in modern environmental aesthetics, the perspective of seeing nature as human life space is requested as a basis. To establish a futuristic civilization that enables nature and human beings to live in harmony, beyond the basic way of modern civilization whose main purpose is to control and utilize nature, it is necessary to establish natural aesthetics from an ecological point of view. In order to establish the philosophical foundation of problems concerning natural aesthetics in the present age, it is necessary in such sense as well to open up the prospects on the new synthesis of the oriental nature view and the western nature view. It came to be recognized.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：自然美学 環境美学 エコロジック的自然美学 G.ペーメ M.ゼール W.ヘンクマン 和辻哲郎 環境倫理学

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2011年の東日本大震災を契機に日本では自然環境についての哲学的な考察への要請が強く意識されるようになった。本研究課題の研究代表者である平山もまた専攻する美学研究の立場から環境美学・自然美学についての現代における本格的な研究の必要性を自覚するようになり、従来の哲学的・伝統的な美学研究を踏まえつつもさらに現代美学の新たな潮流との接続において自然環境問題についての美学的考察を試みるに至った。これまでに2度にわたる科研費による研究補助により、「環境美学における自然美の哲学的基礎付け」(2009-2011)ならびに「環境美学における哲学的自然美論の現代的射程」(2013-2016)という課題研究を実施してきたが、本研究課題は、これらを踏まえつつさらに自然環境問題についての美学的考察を深化させるべく計画されたものである。

2. 研究の目的

現代ドイツにおける自然美学研究を基に、ドイツ人研究者と日本人研究者との共同研究により、従来の日本における環境美学研究の枠組みを超える新たな環境美学研究の可能性を探求することが本研究の目的であった。具体的には第一に現代ドイツ哲学における自然美学・環境美学の研究をさらに推し進めること、第二に従来の伝統的哲学的美学における自然美学と現代哲学における自然美学との比較考察を踏まえつつ現代的な自然美学の特質を明らかにすること、第三に環境美学と環境倫理学とを接合する総合的視野を開拓すること、第四に日本とドイツにおける自然観の共通点と相違点を明らかにすること、第五に現代ドイツにおける環境問題への具体的取り組みについて調査研究することなどが研究目的として設定された。

3. 研究の方法

本研究の研究代表者である平山は日本における環境美学・自然美学研究を推進するためにこれまでの研究の過程において東京工芸大学を拠点に「新規環境美学研究会」を組織してきたが、本課題研究を遂行するにあたり、今回もまたこの研究会を母体として研究を進めることが計画された。具体的にはこの研究会のメンバーを中心に研究分担者・研究協力者を組織し、定期的な合同研究会ならびに研究発表会を開催するとともに、これまでの研究実施において培われた海外研究協力者との研究協力体制を踏まえつつ、本課題研究の遂行が計画された。この研究会は、美学研究者・倫理学研究者・現代哲学研究者・現代芸術研究者等から構成されており、本課題研究にかかわるそれぞれの立場からの研究発表ならびにそれぞれの自由な意見交換の場が確保されることにより、従来の環境美学・自然美学研究を超えた研究視座が開拓されることが計画された。海外研究協力者とはメール等を介した研究協力ばかりでなく、相互に直接の交流の機会を確保するとともに、本研究課題にかかわるテーマのもとに、公開形式による国際シンポジウムの開催が計画された。

4. 研究成果

本研究課題遂行のために研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者をその主要なメンバーとする「新規環境美学研究会」を組織し、3年間の研究期間において毎年定期的な研究発表会を開催し、それらの研究発表会において合計21の研究発表およびそれらをめぐる意見交換が実施された。それらのうち特に平成29年(2017年)11月の研究会においては、現代ドイツにおける自然美学ならびに環境美学の代表的研究者であるゲルノート・ベーム氏(ダルムシュタット工科大学)をドイツより招聘し、公開形式による「エコロジー美学をめぐる国際ワークショップ」を東京工芸大学ならびに立命館大学にて計3日間にわたり開催した。研究代表者である平山は、平成29年(2017年)2月にはドイツの美学辞典の「自然美学」項目の執筆者であるW.ヘンクマン氏(ミュンヘン大学)を訪問し「エコロジー美学」というテーマで2時間にわたりコロキウムを実施するとともに、ドイツにおける自然循環型環境都市として有名なフライブルク市ヴォーバン地区の実地視察調査を実施しその結果を合同研究会にて発表した。さらに平成30年(2018年)8月にはベーム氏をダルムシュタットに訪問し、同氏の最新の論文「環境美学」をめぐり約3時間にわたるコロキウムを実施し、新現象学に基礎づけられた同氏の「霧囲気的美学」についての新たな研究の端緒を開くことができた。これらの研究成果は日本において2019年刊行予定の「美学の事典」(丸善出版)における平山の担当項目「霧囲気的美学 新現象学の挑戦」の執筆に活かされた。芸術家をも含めた国内および国外の研究協力者との積極的な研究交流により、環境美学研究における自然美論の拡張された研究基盤を獲得することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計33件)

平山 敬二、現象における自由(シラー)、ドイツ哲学・思想事典(ミネルヴァ書房)、査読無、2020、

平山 敬二、『素朴文学と情感文学について』(シラー)、ドイツ哲学・思想事典(ミネルヴァ書房)、査読無、2020、

平山 敬二、『カリアス書簡』(シラー)、ドイツ哲学・思想事典(ミネルヴァ書房)、査読無、2020、

- 平山 敬二、霧田気の美学 新現象学の挑戦、美学の事典（丸善出版）、査読無、2019、
- 平山 敬二、グローバリズムとブルーリズム 和辻哲郎の風土論再考、国際伝統芸術研究会誌『国際伝統芸術研究』、査読無、第7号、2019、
- 加藤 泰史、思想の言葉 批判と公共、思想（岩波書店）、査読無、2019、2-6
- 加藤 泰史、公共と尊厳 - 一つの見取り図、思想（岩波書店）、査読無、2019、7-28
- 圓井 義典、「私は、あなたがそこに何をみるのかに関心がないのです。」、「『芸術世界』（東京工芸大学芸術学部紀要）、査読有、第25号、2019、
- 圓井 義典、「関係者が語るとがび：アーティストと中学生のコラボレーションをどう考えましたか?」、「『とがびプロジェクト 中学生が学校を美術館に変えた』（東信堂）、査読無、2019、108-113
- 吉田 幸司、スペキュラティブ・デザインとスペキュラティブ・フィロソフィー、『プロセス思想』、査読無、第19号、2019、
- 鈴木 賢子、畠山直哉による陸前高田の写真をめぐって、『埼玉大学紀要 教養学部』、査読無、第54巻2号、2019、53 - 69
- 横山 陸、生態学的現象学の源泉としてのマッハ、ゲシュタルト心理学、シェーラー：メルロ＝ポンティとシェーラーの比較研究に向けて、メルロ＝ポンティ研究、査読無、第22号、2019、79-103
- 加藤 泰史、ビルンバッハーの功利主義とドイツの生命・環境倫理学 監訳者あとがきに代えて、ディーター・ビルンバッハー『生命倫理学 自然と利害関心の間』（法政大学出版局）、査読無、2018、497-509
- 圓井 義典、写真教育にいかにして哲学的実践の場を導入するか、『みんなで考えよう』創刊号（哲学プラクティス連絡会）、査読無、第1号、2018、41 - 54
- 高木 駿、カント美学とヘノロジー、『新プラトン主義研究』、査読有、第17号、2018、73-84
- 平山 敬二、平敷兼七写真展「沖縄、愛しき人よ、時よ」展評、東京工芸大学写大ギャラリー一年報、査読無、Annual Report 2017、2018、p.12
- 平山 敬二、グローバリズムとナショナリズム、国際伝統芸術研究会誌『国際伝統芸術研究』、査読無、第6号、2017、57-58
- 平山 敬二、8月の一枚：「吉川経家のこと知っていますか?」、東京工芸大学芸術学部基礎教育プログリーナー連載、査読無、2017、
- 長澤 麻子、ベンヤミンと言語：四つの断想（一）、立命館文学、査読無、654号、2017、108-126
- 府川 純一郎、アドルノ『自然史の理念』における「意味」と「含意」 隠れた通奏低音からの読み直しの試み、唯物論、査読有、第91号、2017、91-104
- ⑳ 府川 純一郎、Falsche Projektion oder wahre Solidaritaet? - Ueber die Vermenschlichung der Natur in Adornos These der Aesthetik-、ドイツ応用倫理学研究、査読無、第7号、2017、107-123
- ㉑ 鈴木 賢子、On image processing by W. G. Sebald、Proceedings of ICA 2016: Aesthetics and Mass Culture, The Korean Aesthetics Society〔IAA（国際美学会）ソウル大会研究発表報告集〕、査読無、2017、277-280
- ㉒ 鈴木 賢子、Katsuhiko Miyamoto's The Fukushima No. 1 Nuclear Power Plant Shrine: 'Acting-Out' and 'Working-Through', Retracing the Past: Historical Continuity in Aesthetics from a Global Perspective. IAA Yearbook、査読無、2017、211-233
- ㉓ 長澤 麻子、哲学とエッセイ（1）、立命館文学、査読無、651号、2017、99-119
- ㉔ 吉田 幸司、「生命（life）」の形而上学 人間学へのホワイトヘッド哲学の応用、人間学紀要、査読有、46号、2017、41-60
- ㉕ 吉田 幸司、ホワイトヘッドの思弁哲学の方法 クワインの自然主義と比較して、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集、査読無、35号、2017、21-34
- ㉖ 高木 駿、趣味判断が誤るとき - 『判断力批判』における情感的意識の観点から、美学、査読有、250号、2017、13-24
- ㉗ 加藤 泰史、思想の言葉 「尊厳」概念のアクチュアリティ、思想、査読無、1114号、2016、2-7

- ②⑨ 加藤 泰史、尊厳概念史の再構築に向けて、思想、査読無、1114号、2016、8-33
- ③⑩ 吉田 幸司・大厩諒・清水友輔、気づきと価値の生成 内部観測演劇の内部観測哲学、エウレカ・プロジェクトE!、査読無、8号、2016、76-91
- ③⑪ 高木 駿、趣味判断『このバラは美しい』に関するカントの自己矛盾?、美学、査読有、248号、2016、13-24
- ③⑫ 高木 駿、趣味判断における快の感情の生成 『認識一般』からの捉え直し、日本カント研究、査読有、17号、2016、157-171
- ③⑬ 高木 駿、『趣味の主観主義』を拡張する 『判断力批判』における『認識一般』を導き糸に、哲学論集、査読有、45号、2016、73-88

〔学会発表〕(計 46 件)

- 平山 敬二、ゲルノート・ベーム氏とのコロキウムについての報告、第 11 回新規環境美学研究会、2019
- 長澤 麻子、詩人と庭 ルードルフ・ボルヒャルトの『情熱の庭師』から、第 11 回新規環境美学研究会、2019
- 加藤 泰史、人文学・社会科学の社会的インパクトとは何か? 「学問の尊厳」と「学問の Civic Turn」、第 6 回一橋大学政策フォーラム、2019
- 加藤 泰史、「尊厳概念のグローバルスタンダードの構築に向けた理論的・概念的・比較文化論的研究」への助走、小倉紀蔵研究室・第 34 回コロキウム(京都大学)、2019
- KATO, yasushi、Kant's concept of the "public use of reason"、The 26. Hitotsubashi International Conference on Philosophy/Social Philosophy/Applied Ethics and the 87th Japanese-German Association of Applied Ethics (国際学会)、2019
- 阿部 美由起、ゲルノート・ベームの新刊『身体 我々自らの自然』(Gernot Boehme, Leib: Die Natur, die wir selbst sind, Suhrkamp, 2019)を読む、第 11 回新規環境美学研究会、2019
- 圓井 義典、写真は現実を変革しうるか? 写真家としての視点から、「写真×哲学」公開シンポジウム 2019、2019
- 圓井 義典、私たちはプラトンに反論できるのか? ダントーとランシエールを補助線にして、第 11 回新規環境美学研究会、2019
- 吉田 幸司、哲学シンキング 問いを通じた思考の拡張メソッド、ライオン株式会社(招待講演)、2019
- 吉田 幸司、アーティストが哲学する意義とは? - スペキュラティブ・フィロソフィーの視点から、「写真×哲学」公開シンポジウム(招待講演)、2019
- 府川 純一郎、アドルノの自然美は『形而上学的』か? M・ゼールによるアドルノ批判を再検討する、第 14 回形象論研究会、2019
- 高木 駿、情感的価値のための適切さの基準 『判断力批判』をたよりに、カント研究会第 324 回例会、2019
- 鈴木 賢子、民藝の美 有機的共同体としての 民衆 と自然、第 11 回新規環境美学研究会、2019
- 横山 陸、Philosophy for Parents: Love as a Form of We-Intentionality、シンポジウム「トランスジェンダーの哲学&共同行為論」(招待講演)(国際学会)、2019
- 平山 敬二、高橋陽一郎著『芸術としての哲学 ショーペンハウアー哲学における矛盾の意味』(2016 年、晃洋書房)を読む、日本ショーペンハウアー協会(合評会)、2018
- KATO, yasushi、Project 2023 WCP - Toward a Pluralized World Philosophy、General Assembly of FISP (FEDERATION INTERNATIONALE DES SOCIETES DE PHILOSOPHIE)(国際学会)、2018
- 阿部 美由起、プラクシスとしてのゲルノート・ベームの自然美学、第 10 回新規環境美学研究会、2018
- 吉田 幸司、スペキュラティブ・デザインとスペキュラティブ・フィロソフィー、日本ホワイトヘッド・プロセス学会(第 40 回)(招待講演)、2018
- 吉田 幸司、落語×哲学 生の現実の探求、日本大学芸術学部共同研究「<笑い>についての総合研究」(招待講演)、2018
- 府川 純一郎、『自然史』としての歴史と、その破棄可能性を巡るアドルノの考察、第 41 回唯物論研究協会全国大会、2018
- ②① 高木 駿、カント美学における醜さをめぐる議論状況と問題、第 10 回新規環境美学研究会、2018

- ② 横山 陸、ハルトムート・ローザの共鳴理論における環境美学と環境倫理学の交点、第 1 回新規環境美学研究会、2018
- ③ 横山 陸、M.シェーラーにおける他者知覚論の再検討、日本現象学会第 40 回研究大会、ワークショップ「他者の感情は見えるのか？減少額と分析哲学の源泉から問い直す」、2018
- ④ 横山 陸、法感情の現象学：ヌスバウムとシュミッツの感情の哲学の比較を通じて、日本現象学会・社会科学会第 35 回大会、2018
- ⑤ 横山 陸、マックス・シェーラーと和辻哲郎：二つの倫理学の構想、現象學與倫理學：歐州與東亞視域中的舍勒（招待講演）（国際学会）、2018
- ⑥ 平山 敬二、グローバリズムとプルーラリズム 和辻哲郎の風土論再考、国際伝統藝術研究会第 16 回研究会（招待講演）、2017
- ⑦ 平山 敬二、フライブルク市ヴォーバン地区の視察報告、第 8 回新規環境美学研究会、2017
- ⑧ 平山 敬二、グローバリズムとプルーラリズム 和辻の風土論再考、日本大学文理学部大学院特別講義（招待講演）、2017
- ⑨ 阿部 美由起、“Aktive Passivitaet ” から読み解くマルティン・ゼールの美の概念、第 8 回新規環境美学研究会、2017
- ⑩ 長澤 麻子、ベンヤミンと言語 認識批判におけるアレゴリーと言語、日独文化研究所哲学講座（連続講演）、2017
- ⑪ 長澤 麻子、ベンヤミンと言語 翻訳者と「根源」の言語、日独文化研究所哲学講座（連続講演）、2017
- ⑫ 長澤 麻子、ベンヤミンと言語 社会と言語：そして歴史認識の時限へ）、日独文化研究所哲学講座（連続講演）、2017
- ⑬ 長澤 麻子、ベンヤミンと言語 近代批判としての「魔術」的言語、日独文化研究所哲学講座（連続講演）、2017
- ⑭ 長澤 麻子、哲学とエッセイ・序論、第 8 回新規環境美学研究会、2017
- ⑮ 府川 純一郎、アドルノの風景論 自然美、音楽表象、風景画の事例において、第 8 回新規環境美学研究会、2017
- ⑯ 高木 駿、カントを趣味のエリート主義から真に解放する、第 8 回新規環境美学研究会、2017
- ⑰ 加藤 泰史、Philosophy as a Critical Facilitator in the University -- On the Public Use of Philosophy in the University--、日本哲学会第 75 回大会、2016
- ⑱ 加藤 泰史、現代の尊厳問題、第 19 回一橋哲学フォーラム、2016
- ⑲ 加藤 泰史、Watsuji und Herder ueber Kultur und Uebersetzung- Eine Zwischenbetrachtung-（文化と翻訳をめぐる和辻とヘルダー 中間考察）、日本思想研究ワークショップ「翻訳と日本哲学」（ドイツ・ライプツヒ大学）、2016
- ⑳ 加藤 泰史、尊厳のアクチュアリティ、一橋大学政策フォーラム、2016
- ㉑ 加藤 泰史、「理性の公共的使用」とは何か？「グローバルな公共性」の構築に向けて、中国・東北師範大学教育学部研究講演会（招待講演）、2016
- ㉒ 阿部 美由起、ゲルノート・ベームにおける自然の再自然化・再文化化の意味について、第 7 回新規環境美学研究会、2016
- ㉓ 吉田 幸司、ホワイトヘッドの有機体論的自然観 科学・哲学・芸術を統合した智の実現へ向けて、第 7 回新規環境美学研究会（招待講演）、2016
- ㉔ 府川 純一郎、アドルノの自然美学の（ウン）アクトゥアリテート 「自然の言語」を中心に、第 20 回一橋大学哲学・社会思想学会、2016
- ㉕ 高木 駿、カントの多元主義 理論的領域における展望、上智大学哲学会、2016
- ㉖ 高木 駿、カント美学とヘノロジー 『判断力批判』における「情感的意識」を契機として、新プラトン主義協会、2016

〔図書〕（計 10 件）

- YOKOYAMA, riku, et al., Springer, Max Scheler: His Thought and Influence（共著）、2020、
 アクセル・ホネット著、出口 剛司・宮本 真也・日暮 雅夫・片上 平二郎・長澤 麻子訳、法政大学出版局、『理性の病理』、2019、311（139 - 194）
 藤野 寛、杉内 有介、伊藤 雅俊、守 博紀、西村 紗知、鈴木 賢子、長 チノリ、府川 純一郎、西村 誠（共著）、花伝社、『アドルノのノと美学』、2019、

ディーター・ビルンバッハー(著) 加藤 泰史、高畑 祐人、中澤 武(監訳) 遠藤 寿一、河村 克俊、小谷 英生、瀬川 真吾、馬場 智一、府川 純一郎、松本 大理、南 孝典、山蔦 真之、横山 陸(翻訳担当)、法政大学出版局、『生命倫理学 自然と利害関心の間』、2018、509

マルティン・ゼール、高畑 祐人、法政大学出版局、『幸福の形式に関する試論』、2018、430

圓井 義典、吉田 幸司、岸 剛史、篠田 優、菅泉 亜沙子、はしもと ゆか、「写真×哲学」、「写真×哲学」2017年度活動報告書、2018、12(4, 6-9, 26-29)

加藤 泰史 他、法政大学出版局、『尊厳概念のダイナミズム』、2017、442

圓井 義典、吉田 幸司、柴野 京子、川島 崇志、篠田 優、菅泉 亜沙子、岡本 創、桑原 仁太、高田 怜美、今成 鈴香、今井 祐里、堀越 耀介、斉藤 音夢、出原 麻里子、東京工芸大学写真学科/上智大学メディア・ジャーナリズム研究所、写真と哲学の対話と実践 東京工芸大学写真学科と上智大学メディア・ジャーナリズム研究所共催企画報告書、2017、9(6-9, 11-15)

小林のりお、大嶋浩、圓井義典、武蔵野美術大学映像学科小林のりお研究室、共同研究「場における写真の展開 写真の使用法に関する調査・研究」ウルトラ・ピクニック・プロジェクト報告書、2017、63(7, 19-22, 23-59, 60-78, 116-117)

高木 駿、哲書房、フィヒテ全集 第14巻一八〇五-〇七年の知識学、2016、570(420-570)

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加藤 泰史

ローマ字氏名：(KATO, yasushi)

所属研究機関名：一橋大学

部局名：大学院社会学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁)：90183780

研究分担者氏名：長澤 麻子

ローマ字氏名：(NAGASAWA, asako)

所属研究機関名：立命館大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30611628

(2)研究協力者

研究協力者氏名：阿部 美由起

ローマ字氏名：(ABE, miyuki)

研究協力者氏名：高畑 祐人

ローマ字氏名：(TAKAHATA, yuto)

研究協力者氏名：府川 純一郎

ローマ字氏名：(FUKAWA, junichiro)

研究協力者氏名：高木 駿

ローマ字氏名：(TAKAGI, shun)

研究協力者氏名：鈴木 賢子

ローマ字氏名：(SUZUKI, yoshiko)

研究協力者氏名：圓井 義典

ローマ字氏名：(MARUI, yoshinori)

研究協力者氏名：吉田 幸司

ローマ字氏名：(YOSHIDA, koji)

研究協力者氏名：横山 陸

ローマ字氏名：(YOKOYAMA, riku)